

記録
35ミリ
カラー／35分
日・英語版

■企画
(財)ポララ伝統文化
振興財団

スタッフ

■製作
村山和雄
六鹿英雄

■脚本・演出
村山英治

■撮影
村山和雄
金山富男

■作曲
山内 忠

■編集
沼崎梅子

■照明
浅見良二
森 準蔵
本橋俊男

■録音
伊藤 亨

■解説
宇野重吉

文部省選定 第39回芸術祭大賞 1984年教育映画祭優秀作品賞
1984年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第3位

〔監修〕

北村哲郎

〔協力〕

静岡市立芹沢銈介美術館

芹沢染紙研究所

日本民藝館

大原美術館

(株)中央公論社

(株)ざくろ

外村吉之介

小川龍彦

金子量重

四本貴資

他

〔資料提供〕

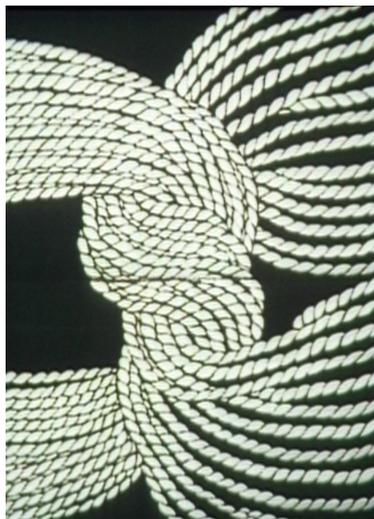
日本近代文学館

テレビ朝日

毎日新聞社

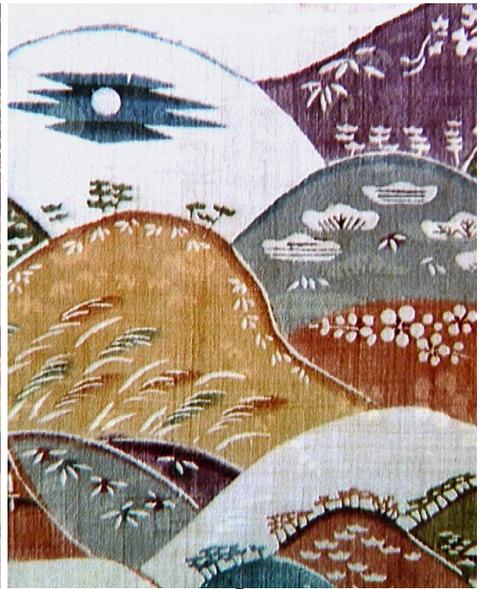
石川光陽

他



染色作家・芹沢銈介は、型絵染の重要無形文化財保持者で文化功労者でもある。映画は、大正時代・戦中・戦後と、柳宗悦の民芸運動と、沖縄の紅型に出会って影響を受けた、その長い生涯にそって多彩な作品を紹介しながら、楽しい模様と色彩に溢れた芹沢芸術の真髓に迫る。映画は亡くなる数ヵ月前の仕事ぶりや談話、気迫ある表情も収録している。





東京蒲田の芹沢の居間を訪れた人は、東北地方から移築した民家の居間が世界の民芸品の展示場でもあるのに驚かされる。芹沢はそういう中でいつも仕事をしていた。屋敷内には染場や干場もあった。彼の模様の下絵は、過去の夥しい素描の中から生まれている。映画は、下絵が型紙に彫られ、色差しされて美しい染色模様が生まれる工程を映し出す。

芹沢銈介は、明治28年静岡市の大きな呉服屋に生れ、少年時代は画家を志したが、高等工業の図案科を出て染色作家の道を歩む。それは日本の民芸運動の提唱者柳宗悦と、沖縄の紅型との出会いによる。初期の作品、静岡時代の最後を飾る『いそほ物語絵巻』は国際的にも注目された。

大きな希望を抱いて上京、昭和9年、39歳の時蒲田に移る。昭和はじめの不況時代で、生活は苦しかったが、清貧の中で和紙に出会った。よい手漉き和紙は布同様に染色できる。この和紙で「絵本どんきほうて」が生れた。

昭和14年に柳宗悦らと共に初めて沖縄に渡った。紅型に出会って10年の歳月がたったが、新しい道をいく思いで夢中だった。戦争が長引き生活の窮乏がつのる中で、昭和16年、大作『法然上人絵伝』を完成。この時代の「益子日帰り」は、肉筆のうまさをよく表している。

昭和20年4月、空襲で工房、家財すべてを失ったが、その年の秋には早くも型染カレンダーの制作を始めている。昭和25年から30年頃になると芹沢の仕事も一齐に花開き、爽やかな外気を浴びて充実した作品を生む。それを象徴するのが数多い暖簾で、他にも着物、屏風、絵本、装丁と、多岐にわたった。60歳から70歳にかけて新聞の連載小説の挿画でも独自の仕事をした。仕事一途に生きぬいた芹沢は、88歳になった今も、仕事に情熱を傾け続けている。